

国立国語研究所学術情報リポジトリ

# 「国際社会における日本語についての総合的研究」

著者	江川 清, 米田 正人
雑誌名	国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集 ： 歩こう日本語の世界を
ページ	121-126
発行年	1998-12-14
URL	<a href="http://doi.org/10.15084/00003314">http://doi.org/10.15084/00003314</a>

## 「国際社会における日本語についての総合的研究」

研究班1・研究班代表者 江川 清（情報資料研究部）  
新プロ「日本語」事務局 米田正人（言語教育研究部）

国立国語研究所を中心として標記の大型プロジェクト研究が進められています。この研究は、平成6年4月より5年計画で、文部省科学研究費補助金（創成的基礎研究費）の交付を受けて行われているもので、私たちは『新プロ「日本語」』という略称で呼んでいます。創成的基礎研究費という費目は平成2年度に始動し始めて以来ずっと理系の研究に対して補助が行われてきました。私たちの研究が人文社会系としては初めてのものということになります。それだけに関係者からの期待は大きく、国語研究所としても水谷修前所長のもと、全所をあげてこの研究課題に取り組んできました。月日のたつのは速いもので、準備段階も含めると5年以上の歳月が流れ、このプロジェクトも残すところあと5ヶ月弱というところまでできました。関係の研究者たちは最後の力を振り絞って日々研究に邁進しているところです。

### ☆ 新プロ？

平成元年7月の学術審議会建議「学術研究振興のため新たな方策について――学術の新しい展開のためのプログラム――」に基づいて、平成2年度から実施されている大型プロジェクト研究のことを「新プログラム研究」または「新プロ」と呼んでいる。平成5年度現在、10課題が採択され研究が行われている。平成6年度には新たに2課題が採択された（研究期間はすべて5年）。

この新プログラム研究は、各種の組織、施策、予算の弾力的な運用等で推進される点に特徴があり、具体的には以下の3点を統合した形で運用されている。

- 1 科学研究費補助金（創成的基礎研究費）
- 2 日本学術振興会・特別研究員の活用
- 3 施設設立のための特別会計（ただし、国語研は予算上一般会計に属するため、3の適用は受けず）

ここでは表記の研究課題のもと、どのような研究が進められているのかをご紹介しますことにします。

まずは、プロジェクトの発進に当たって研究代表者の水谷が記した一文をご紹介します。この文章は新プロ「日本語」事務局が発行しているニュースレターの創刊号に載っているものです。

## 新プロ「国際社会における日本語についての総合的研究」の出発に際して

水 谷 修

日本語を言語学的な立場からだけではなく、社会学的・心理学的な視点、生理学的な観点、理科や数学の教育の立場に立って追究する試みは、実は過去にもしばしば試みられてきた。1977年に開始され、7年間にわたって継続された特定研究「言語」のプロジェクトは、その最も大きなもののひとつであった。自然科学の研究者から、「言語」の研究が、自然科学教育を適切に行うためには不可欠だという認識が示され、人文系の研究者との提携による総合的な研究活動が展開された。

それから約17年後の今日、学問研究の領域を越えて行う言語の研究の必要性はより高くなってきている。特に、国際化・情報化の進展は、言語が社会活動の中で果たす役割の重要性をより大きなものとしている。1992年、国語審議会も問題の重要性に応ずべく、従来の表記中心の審議内容から転換し、日本語使用の問題を、より広い立場から取り上げることとなった。

新プログラム「国際社会における日本語についての総合的研究」は、このような激変する社会状況の中で果たす日本語の役割や機能を、より総合的な視点に立って把握するという使命を担って発足した。

日本語は国際的な共通語となり得るかとか、今日日本語に起こっている変化は放置しておいて良いのだろうか、などという議論も多く行われているが、残念なことに我々は、そのような議論を進めるための十分な客観的な情報を持ち合わせていない。日本語教育が盛んに行われ、日本語を使う人々が世界の中で急増したということが言われる。確かに日本語が日本人だけのものではなくになり始めたことは事実ではあるが、実際にどのような形で、また、どのような理由で世界の人々に日本語が受け入れられているのか、その現実把握についてさえ、ほとんど情報は無い。

その情報を的確に把握していくためには、慎重に準備された計画に基づいた実態調査を実施するとともに、日本語がコミュニケーション上で果たしている役割や機能を、言語学以外の研究領域との結びつきの中で解明していかなければならない。社会生活、研究・教育活動の中での言語の役割を明らかにするための日本語の研究は、言語に関する研究の新しい展開を必要とする。

解明を急がなければならない研究のテーマは限りなく広がっているが、この新プログラム「国際社会における日本語についての総合的研究」に与えられる期間は5年間であり、焦点を明確にしておく必要もある。

将来の新しい日本語研究を発展させる基盤とするために、まず、国際化する日本語の実態を国内と国外の両者について、少しでも多くの事実に関する情報を掌握し、また、そのための手法を確立すること——日本語国際センサスの実施と行動計量学的研究——を縦の柱とし、言語を軸とした文化摩擦の研究、日本語そのものの特性の解明を目指す研究、通訳・翻訳・情報発信・言語教育の統合的研究等を横に組み合わせ、限界を明確に意識しながら、確実な成果を得ようと企図している。

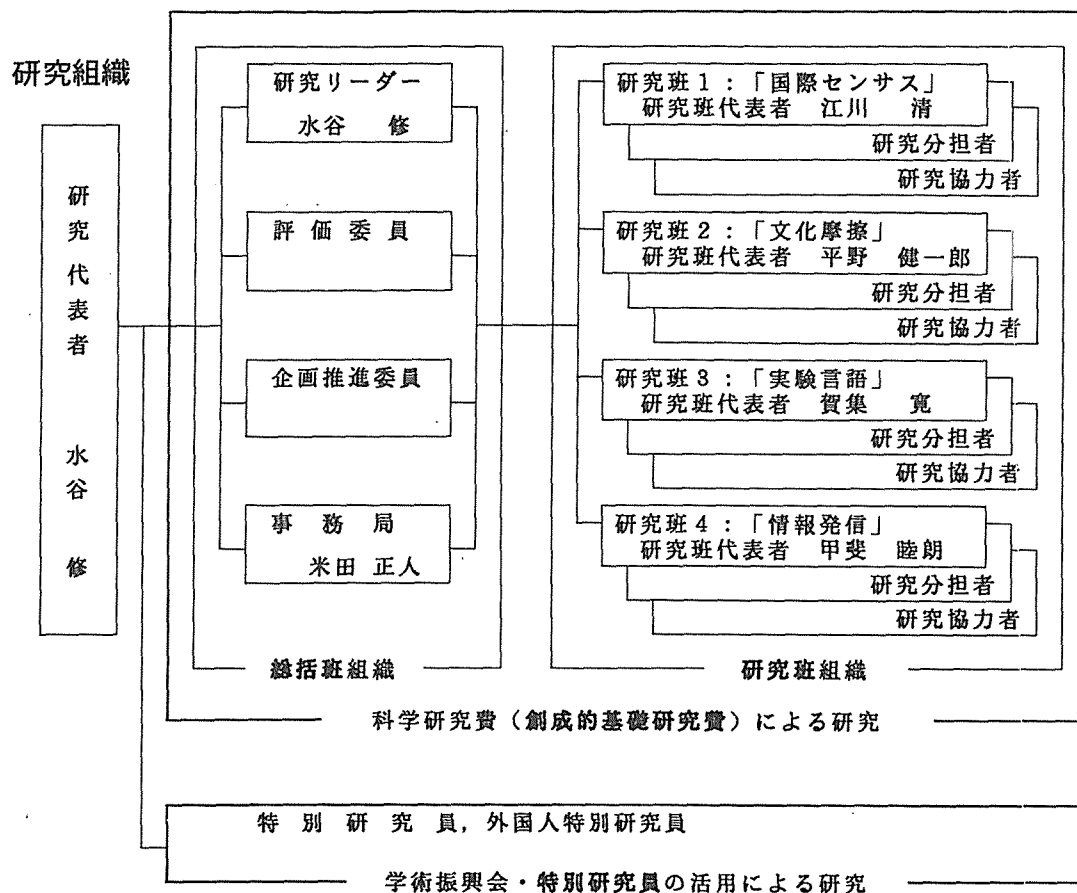
以下ではプロジェクト全体の研究目的、研究計画の概要、研究組織について述べるとともに、平成9年度までの研究経過の概略を具体的に示すことにします。

## 研究目的

我が国の国際的役割の増大に伴い、学術研究はもちろん文化・経済等各方面において日本語を通じた国際相互理解の必要性が高まっている。今や日本語が日本人だけの、また日本語学的な視点からだけの研究対象であった時代は終り、国際社会における日本語の使用実態を多角的に研究するとともに、日本語を国際的に一層流通させるためのあるべき姿を学術的に追究する時期にきている。しかし、この問題に正面から取り組んだ総合的な学術的研究は未だ存在しない。

そこで、本プロジェクト研究では、国際社会及び国際化した日本のなかで日本語が現在どのような範囲で、いかに使用されているかを浮き彫りにするための研究を中核にすえて、将来における日本語使用の発展動向に関する研究も試みる。さらに、日本人と外国人との言語習慣の差異に起因する文化摩擦の問題や、日本語による海外への情報発信の問題について、関連諸科学を総合して研究を推進する。この研究は、ただ単に今日の日本語使用の広がりとその未来を見通すためだけのものではなく、もう一段踏み込んで日本語を国際的にさらに普及させるための政策的観点をも射程に入れているという点に特色がある。

本プロジェクト研究で得られる成果は、自然科学を含む学問全体の国際的交流は言うまでもなく、我が国の文化・経済・社会全体の発展に大きく寄与するであろう。同時に、そこから言語研究の世界にも有益な知見がもたらされることが考えられる。



## 研究計画の概要

研究の内容は、目的に応じて大きく以下の4つに区分されます。

### 1. 日本語観国際センサスの実施と行動計量学的研究（センサス）

日本語観国際センサスは、海外調査と国内調査の両者から成る。主要な調査は、調査対象国の人たちの日本語及び日本語以外の外国語への関心・接触度、日本と日本語について抱くイメージ・知識・親近感などの項目を用いた質問によって、日本語および日本語環境の現状を把握し、日本語の将来像を描き出す。また、日本語学習に関する構造分析や要因分析を行うことによって日本語普及の問題点を明らかにしようとする。海外調査はこの主要調査以外に、特定の人々や地域などを対象として事例調査及びメディア調査も実施するが、調査の困難な地域や国についても各種統計資料に基づく調査によって可能な限りの情報を収集する。また、国内調査についても海外調査同様、ランダムサンプリング調査によって実態調査を進めるとともに、留学生や外国人居住者についても、対象と目標を明確に設定した上で事例調査を実施する。

### 2. 言語事象を中心とする我が国をとりまく文化摩擦の研究（文化摩擦）

文化摩擦の研究では、「外国人との言語的接触による、相互理解促進についての研究」と「外国人との非言語的コミュニケーションの可能性に関する研究」の2つの柱を立てる。文化摩擦の問題は複雑な様相を呈し、客観的分析が困難だと考えられてきたが、本研究では問題追究の有効な糸口として言語行動や非言語行動を含む言語事象を取り上げ、多面的・実証的な分析を行う。

### 3. 日本語表記・音声の実験言語学的研究（実験言語）

本研究は、実験言語学的手法及び認知科学的手法を援用して、日本語文字・音声の言語的特性の一層の解明を目指すとともに、日本語文字・音声と人間の言語認知過程の関係についての比較文化研究を進める。特に、アルファベット文化圏の言語を母語とする被験者と日本語を母語とする被験者の認知過程を比較することによって、日本語表記・音声体系が人間の高次認知機能に及ぼす影響を究明する。

### 4. 情報発信のための言語資源の整備に関する研究（情報発信）

「日本語をとりまく通訳・翻訳体制の充実、および整備に関する研究」、「海外への情報発信に関する研究—日本語文字情報のより効率的な通信手段の開発—」、「外国人、及び日本人に対する言語教育の統合的研究—国語教育、日本語教育、外国語教育における独自性と普遍性」の3つを主たる柱とし、情報発信を積極化することに貢献可能な研究を展開する。

## 年度別の具体的研究内容

### 研究班1（センサス）

- 平成6年度 「日本語観国際センサス」のための調査票原案を作成し、日本語観等に関する予備調査を行った。また、欧米、アジア各国で日本語の普及状況に関する観察・聴取の事例調査を行うとともに、中国・韓国で面接調査を行った。この他、国内外でメディアにおける日本語の出現・接触状況調査を行った。
- 平成7年度 「日本語観国際センサス」に関する既存資料の収集を継続するとともに、調査票原案をほぼ確定した。また、アメリカにおける日本語からの借用語の意識調査、外国人留学生を対象とした阪神大震災における情報伝達状況の聴取調査等を行った。この他、国内でメディア調査を継続した。
- 平成8年度 日本語観国際センサスとして第一次調査（15カ国）を実施した。聴取調査では海外の日系企業を対象に職場での言語使用の調査を行うとともに、各国の言語状況や言語政策に関する聴取を継続した。
- 平成9年度 日本語観国際センサスの第二次調査（12カ国）を実施し、結果の集計・分析を開始した。また、災害時言語対策、海外マスメディアにおける日本語等の研究を継続した。

### 研究班2（文化摩擦）

- 平成6年度 日本語の歴史における多言語状況を古代・明治期それぞれについて解明すること、他文化への適応状況を理論化すること、さらに国内の諸地域間、および日本語非母語話者と日本人間の言語伝達状況の調査を開始した。
- 平成7年度 日本語形成史、国際関係における言語の位置の理論的考察をもとに、海外におけるマイノリティーの言語状況、国内における言語接触等の調査分析を行った。さらに国内の諸地域間、および日本語非母語話者と日本人間の言語伝達状況を刺激ビデオ調査、観察調査等で調査し分析を行った。
- 平成8年度 平成7年度の研究をさらに深め、調査対象・調査内容を拡大するなど、これまでの調査研究を継続発展させた。
- 平成9年度 平成6年度、平成7年度の研究をさらに継続発展させた。とくに理論的研究班では文化適応についてのモデル化を模索した。

### 研究班3（実験言語）

- 平成6年度 文字研究では心理的手法により日本語表記の認知的特徴を探る一方、心理学の文献目録を作成した。音声研究では韻律学習用プログラムを開発し、日仏人を対象に有効性を検討した。計算機実験では機械辞書や言語表記変換プログラムを作成した。
- 平成7年度 文字研究では文字言語認知の文献目録を作成した。また、語表記の調査を継続しデータベース化に着手した。音声研究では韻律処理プログラム開発を進め、アクセント・知覚テストの分析を進めた。計算機実験では分類語彙表を機械辞書化したうえで、日本語表記変換用の機械辞書を作成した。
- 平成8年度 文字研究では語の表記に関する心理的属性のデータベース化の作業を行った。音声研究では日仏語に関する韻律規則の知識ベースを作成した。さらに、諸言語話者の日本語韻律習得の知覚面の分析結果をまとめた。計算機実験では機械辞書と変換プログラムを補強し機械翻訳への応用を模索した。
- 平成9年度 文字研究では日本語表記および文字に関する心理言語学的研究を行った。音声

研究では韻律知覚生成プログラムの改善、およびこれまでに得た知見の学会発表を行った。計算機実験では表記変換プログラムの作成、ならびに日中、日英作文の分析を行った。

#### 研究班4（情報発信）

平成6年度 同時通訳研究は日英・英日同時通訳訳出過程解明の実験および研究動向の調査を行った。漢字符号研究は統合漢字符号の通信試験を行うとともに、インターネットにおける日本語送受信時の変換エラーのデータを収集した。コーパス研究は研究資料の収集を開始した。言語教育研究では言語教育政策懇談会とインターナショナル・スクール日本語予備調査の実施、および豪州初等中等レベルの第二言語教育シラバスの収集を行った。

平成7年度 同時通訳研究は訳出された日英語の構文分析および研究動向の調査を行った。漢字符号研究は4バイトコード漢字の異体字を表現する漢字符号の実験を行った。コーパス研究は明治期雑誌の計算機入力を行った。言語教育研究では言語教育政策懇談会、および国語教育・日本語教育の実態調査の準備調査を行った。

平成8年度 同時通訳研究ではこれまでの研究を発展させるとともに、新たに放送同時通訳に関する研究を開始した。漢字符号研究は2バイトコード漢字と4バイトコード漢字の混在処理、通信用符号化の実験を行った。コーパス研究は明治期雑誌の計算機入力を継続し、対訳辞書『英華字典』の入力を開始した。言語教育研究では言語教育政策懇談会、および外国語教育・外国人学校を中心とする国語・日本語教育の第二次実態調査を行った。

平成9年度 同時通訳研究では放送通訳の受け手調査を行い報告書を刊行した。コーパス研究は明治期雑誌『太陽』と対訳辞書『英華字典』の計算機入力を継続した。漢字符号研究は2次符号化実験およびデータベース化を行った。言語教育研究では教科書の言語表現、帰国子女への日本語教育等の研究を進めた。

さて、国立国語研究所50周年記念事業の一環として、ポスター発表を準備しています。平成10年12月14日(月)、13時から14時30分に1号館2階で行います。内容は世界28か国で実施した「日本語観国際センサス」の概要になります。

また、平成10年12月16日(木)、17日(金)の両日、国際連合大学国際会議場において「国際社会と日本語」というテーマの国際シンポジウムを開催します。このシンポジウムでは新プロ「日本語」の研究成果について発表と討論を行い、日本語および日本語研究について考えてみようという主旨の企画です。発表内容と発表者は以下のとおりです。

16日(水) 国際社会における日本語(水谷修)、日本語のいま(江川清)、世界の言語状況と日本語の市場価値(井上史雄)、どんな日本語が世界に知られているか(石野博史)、日本・日本語の印象形成とその変化(姜錫祐)、ポストモダンの価値観と言語意識(真鍋一史)、イメージの中の日本・日本語(鈴木達三)、調査とデータの科学(林知己夫)  
《コメンテータ》庄司博史、平高史也、吉野諒三、ウルリッヒ・アモン、徳川宗賢

17日(木) 言語行動における文化摩擦(杉戸清樹)、日本語らしい抑揚・リズム習得用ソフト(西沼行博、ブノア・ラグリュ)、放送通訳の日本語と視聴者の反応(木佐敬久)  
《シンポジウム》鈴木孝夫、宮島達夫、シュテファン・カイザー、フロリアン・クルマス、佐藤和之(司会)米田正人